

# 戦後80年・・・大刀洗飛行場の歴史を通じて

## 平和のメッセージを発信する



筑前町副町長

岩下定徳さん

昭和58年6月から旧三輪町役場職員。平成20年4月から

筑前町企画政策課で大刀洗平和記念館建設準備を担当、

同21年10月に開館した記念館運営に関わる。同26年4月か

ら筑前町教育委員会生涯学習課長、同28年4月から筑前

町企画課長、令和3年3月定年退職。同7年7月から現職。

### 陸軍大刀洗飛行場の歴史

戦前、戦時中に東洋一を誇った

陸軍大刀洗飛行場（以下、飛行

場）。その歴史は大正8年から

昭和20年までの26年間でした。同飛

行場には昭和15年まで飛行第四聯隊

が駐留、その後は大刀洗陸軍飛行

学校（以下、飛行学校）となり少年

飛行兵などの若きパイロットを養成

した場所でもあります。飛行場周

辺には飛行学校だけではなく、航空

機の整備を行う航空廠、航空技術

兵を養成する第五航空教育隊や陸軍

機を製造する太刀洗製作所などが

あり、2万人とも3万人とも言われ

た兵士や関係者が関わり、飛行場と

その周辺は軍都として発展していき

ます。

飛行学校では延べ1万人のパイロ

ットを養成、その中には陸軍特攻隊と

して戦死された若者たちも数多くい

ます。昭和20年2月、飛行学校は閉校、

その後飛行場は終戦まで陸軍特攻

隊の中継基地として多くの特攻兵を

見送りました。

戦火が激しくなると西日本にお

ける<sup>こうくうきょてん</sup>航空拠点であった<sup>ひこうじょう</sup>飛行場は、

べいぐん<sup>こうげきもくひょう</sup>米軍の攻撃目標になります。昭和

ねん<sup>がつ</sup>20年3月27日と31日、<sup>べいぐんじゅうばくげき</sup>米軍重爆撃

機<sup>B29</sup>が<sup>あ</sup>合わせて180機<sup>きしゅうらい</sup>襲来し、

やく<sup>ばつ</sup>約2500発の爆弾を<sup>とうか</sup>投下、<sup>ひこうじょう</sup>飛行場と

かんれん<sup>しせつ</sup>関連施設は<sup>かいてつき</sup>壊滅的な<sup>ひがい</sup>被害を<sup>う</sup>受けま

した。この<sup>くうしゅう</sup>空襲によって600～1000

にん<sup>ひとびと</sup>人の人々が<sup>ぎせい</sup>犠牲になりました。森に

に<sup>こ</sup>逃げ込んだ<sup>こくみんがっこう</sup>国民学校の<sup>じどう</sup>児童31名が

ばつ<sup>ばくだん</sup>1発の爆弾で<sup>ばくし</sup>爆死するという<sup>ひげき</sup>悲劇も

おこっています。



じょうくう<sup>み</sup>上空から見た<sup>ひこうだいよんれんたい</sup>飛行第四聯隊

## 2 <sup>たちあらいへいわ</sup>大刀洗平和記念館<sup>せつりつ</sup>設立に向けた

けい<sup>い</sup>経緯



ちくぜんちょうりつ<sup>たちあらいへいわ</sup>筑前町立大刀洗平和記念館

<sup>たちあらいへいわ</sup>大刀洗平和記念館（以下、記念

かん<sup>へいせい</sup>館）は平成21年10月に開館しまし

た。平成17年、<sup>きゅうみ</sup>旧三輪町と<sup>きゅうやす</sup>旧夜須

<sup>まち</sup>町が<sup>がっぺい</sup>合併して<sup>ちくぜんまち</sup>筑前町が<sup>たんじょう</sup>誕生、そのシ

ンボルの<sup>てき</sup>事業として<sup>じぎょう</sup>建設し<sup>けんせつ</sup>運営し

ています。<sup>けんせつ</sup>建設にあたっては、<sup>せんじ</sup>戦時

ちゅう<sup>ひこうじょう</sup>中に<sup>かか</sup>飛行場に関わった<sup>ひと</sup>人たちから

おお<sup>しりょうていきょう</sup>多くの資料提供、<sup>しやうげん</sup>証言をいただき

ました。

また、昭和62年から平成20年までは、甘木鉄道太刀洗駅舎を活用した民間の資料館として記念館が運営されており、その施設で収集された資料の多くを移管し保管、その一部を展示しています。散逸を逃れた資料、証言からは平和を願う多くの人たちの思いが伝わります。記念館は、平成29年には新館を増築し、特攻をテーマとした常設展示を充実し、多人数が平和教育に使用できる多目的室を設置、多くの修学旅行生を受け入れています。今年、開館16年目となった記念館は年間入館者が約10万人、開館以来の累計入館者数も175万人を超え、全国から来館されています。小中学生・高校生は修学旅行での平和教育のプログ

ラムとして活用いただき、令和6年度は年間約330校、約2万5千人が来館しています。

### 3 記念館展示物と来館プログラム

記念館には開館当初から大型展示物として、戦時中に実際使われてい

た海軍零式艦上戦闘機三二型（零戦）

と陸軍九七式戦闘機（九七戦）の

実機を展示しています。両機とも世

界で唯一の機体です。令和4年7月か

らは映画『ゴジラ-1.0』の撮影に使

われた海軍局地戦闘機・震電（実物

大模型）を展示しています。震電は

米軍爆撃機B29の迎撃用として、海軍

と九州飛行機（福岡市）で開発さ

れた機体です。試作機の段階で終戦

むか  
を迎えたため「幻の戦闘機」と呼  
ばれています。



きゅうななしきせんとうき  
九七式戦闘機

じょうせつてんじ  
常設展示では①航空技術の発展  
たちあらいひこうじょう  
②大刀洗飛行場とその関連施設の概  
ようれきし  
要や歴史③大刀洗空襲と陸軍特攻を  
おお  
大きなテーマとして、特攻隊員の遺書  
てがみ  
や手紙など実物資料やパネルによっ  
せんぜんせんじちゅう  
て戦前、戦時中の事実を伝え、平和の  
たいせつ  
大切さを発信しています。

へいわ  
平和プログラムとして記念館スタ  
ひこうじょうれきし  
ッフによる飛行場の歴史・館内展示  
ぶつ  
物の説明、映像の上映やボランティア

アによる朗読を行っています。戦争  
たいけんしゃ  
体験者がいなくなる中で、当時のこ  
とをどう伝えていくかは、記念館に  
とっても大きな課題です。朗読は戦  
し  
死した兵士の遺書、戦争民話などを  
だいざい  
題材に行っており、ボランティアの  
かた  
語りに多くの修学旅行生たちが聞き  
入っています。



のこ  
遺された言葉と想い  
(遺書と手紙のコーナー)

#### 4 戦後80年の取り組み

れいわねんせんごねん  
令和7年は戦後80年という節目の年  
でした。戦争体験者の人たち、特に  
へいたい  
兵隊として戦地に赴いた人たちは生

きていれば100歳前後であり、その多くが亡くなられ、その体験を聞くことが出来なくなっています。戦跡と言われる戦時中の軍用施設や戦争の傷跡が残る場所も戦争から80年が経過する中で無くなっています。記念館で行った戦後80年の取り組みの主なものを紹介します。

記念館では令和7年4月、元特攻隊員の鳥谷邦武さんの講演会を開催しました。大刀洗陸軍飛行学校で訓練を積み、戦闘機のパイロットとなった鳥谷さんは昭和20年3月に特攻隊に編成されます。先に特攻出撃した戦友は「特攻なんかで死にたくない」と本音を漏らし、「お前は来るな」とのことばを残したと話されていました。終戦後は帰国がかなわず、極寒のシ

ベリアに1年9ヶ月間抑留され、そこでも多くの戦友を失いました。長い間、戦争体験を語らなかった鳥谷さんですが、講演会では戦争の不条理を訴えられていました。筑前町では戦後80年と合わせ筑前町合併20周年の記念事業として、戦跡・掩体壕の保存・公開に向けた補強・補修工事を行い、令和7年4月から一般公開しています。筑前町に現存する掩体壕は、軍用機などを敵の攻撃から守る格納庫で、終戦間際に造られたものです。戦後は民有地となっていました。筑前町が平成28年に取得していたものです。戦争体験者が少なくなる中で、当時を伝える貴重な実物資料として、戦跡フィールドワークなどでの活用が期待されています。

5 当時の若者たちの想いをつなげて

いきます

戦前、戦時中と、飛行場には今の

若者と同様、『未来』を夢見る若者たち

がいました。飛行機に憧れ、家族を想

いながらも戦地へと飛び立っていき

ました。彼らが守りたかったのは、い

ま私たちが享受している「何気ない

日常」でした。

戦争という極限状態は、個人の

尊厳や生きる権利を奪ってしまいま

す。記念館に展示している遺書や手紙

は、気高い精神の記録であると同時に、

個人の尊厳が奪い去られた時代の悲

痛な叫びでもあります。記念館は、こ

れからも彼らの想いを伝え、平和のメ

ッセージを発信し続けていきます。

# うすいへいわきねんかん 碓井平和祈念館のかたりつき



かましきょういくいんかいしやうがいがくしやうか  
嘉麻市教育委員会 生涯学習課

ぶんかすいしんがかりがくげいいん  
文化推進係 学芸員

いとう  
伊藤みどりさん

2019年より文化財の臨時職員として地域文化財に携わり、

2024年から文化財専門職（学芸員）として、碓井平和祈念館・

碓井郷土館で戦時資料や地域文化財の保存・活用、展示企画を担

当している。

## 1 地域にある「一人ひとりの

戦争体験」を伝える場として

いままねまえうすいへいわきねんかん  
今から30年前、碓井平和祈念館は、

せんそうじんけんふた  
「戦争」と「人権」という二つのキー

ワードをテーマに、「平和」について

かんがしせつかいかん  
考える施設として開館しました。

せんそうおもたい  
戦争のコーナーでは、主にアジア・太

へいようせんそうきしりやうちゅうしんてんじ  
平洋戦争期の資料を中心に展示を

おこなうすいへいわきねんかん  
行っています。碓井平和祈念館のあ

かましげんしばくだんとうか  
る嘉麻市は、原子爆弾が投下されたま

だいきぼくうしゅうう  
ちでも、大規模な空襲を受けたまち

ぐんじしせつしゅうちゅうちいき  
でも、軍事施設が集中していた地域

しいにかまし  
でもありません。強いて言えば、嘉麻

しふくちくほうちいきせきたんさんしゅつ  
市を含む筑豊地域では石炭が産出さ

れ、多くの炭鉱が存在していました。

そこで採掘された石炭は、当時の主要

なエネルギー源として戦争遂行を支

える役割を担っていましたが、それい

外の点では、日本のどこにでもあった

「まち」や「むら」と変わりません。

とうかんちいきく  
当館では、そうした地域に暮らしてい

ひとひとせんそうたいけんしやう  
た人々、一人ひとりの戦争体験に焦

てんあてんじおこな  
点を当てた展示を行っています。展

じしりやうとくべつたちばひと  
示資料は、特別な立場にあった人で

はなく、ごく一般の人々が経験した

せんそうつたらいかんしゃじ  
戦争を伝えるものです。来館者が「自

ぶんおなじょうきやうお  
分が同じ状況に置かれたらどうす

るだろうか」「家族や身近な人が同じ

たち ば 立場 だ っ た ら 」 と 自 然 に 考 え る き っ  
かけ となる 場 所 で あ り た い と 考 え て  
い ます 。

## 2 戦 後 80 年 を 迎 え て

### — 失 わ れ つ つ あ る 記 憶 —

2025 年 は 戦 後 80 年 の 節 目 の 年 で し  
た。全 国 各 地 で 戦 争 と 平 和 を テー マ と  
し た 報 道 や 企 画 が 行 わ れ る 一 方、  
戦 争 を 直 接 体 験 さ れ た 方 々 の 高 齢 化  
が 急 速 に 進 ん で い ます。近 年 で は、ご  
本 人 だ け で な く、そ の 体 験 を 知 る ご 家  
族 の 高 齢 化 も 進 み、「家 じ ま い」や「終  
活」に 伴 っ て、ご 自 宅 で 保 管 さ れ て い  
た 遺 品 や 戦 時 資 料 の 処 分、あ る い は  
寄 贈 に つ い て の 相 談 を 受 け る 機 会 が  
増 え て き ま し た。し か し、ご 本 人 が す  
で に 亡 く な ら れ て い る 場 合、そ の 資

料 が も つ 貴 重 な エ ピ ソード が 分 か  
ら な い こ と も 少 な く あ り ま せ ん。戦 争  
を 体 験 さ れ た 方 は、つ ら い 記 憶 を 思 い  
だ し た く な い と い う 思 い か ら、家 族 に  
さ え 戦 時 中 の こ と を ほ と ん ど 語 ら ず  
に 過 ぎ さ れ た 場 合 も 多 か っ た よ う で  
す。そ の 結 果、記 憶 の 継 承 が 途 切 れ て  
し ま っ て い る 資 料 も 数 多 く 存 在 し て  
い ます。今 後、こ う し た 状 況 は さ ら  
に 増 え て い く こ と が 予 想 さ れ ま す。

## 3 語 り 部 の 声 を つ な い で き た

### と り 組 み

当 館 で は、戦 争 の 記 憶 を 後 世 へ つ な  
ぐ と り 組 み と し て、2012 年 か ら、嘉 麻  
市 お よ び そ の 周 辺 地 域 の 方 々 の 戦 争  
体 験 を 語 り 伝 え る 講 話 会 「語 り 伝 え  
る 戦 争 の 話」を、年 1 回 実 施 し て き ま

した。語り部は、陸軍・海軍で実戦を

経験した元兵士、戦死した兵士の遺族、

満州からの引き揚げ体験者、銃後の

動員に就いた女学生など、多岐にわた

りました。それぞれの立場から語られ

る戦争体験は、若い頃、あるいは子ども

も時代の記憶でありながら、非常に

詳細で、生々しいものでした。戦争が

いかに強烈な体験であり、その後の

人生に大きな影響を与え続けている

のかを、私たちは毎回あらためて

実感させられました。しかし、語り部

の高齢化により、対話形式による講話

会の継続は困難となり、2023年の第12

回をもって、この取り組みは一区切り

を迎えました。

#### 4 資料と記憶で語り継ぐ

## 戦後80年企画展

「これから戦争の記憶をどのよう

に語り継いでいくのか」という課題を

抱えながら迎えた2025年の夏、当館で

は戦後80年企画展「あの日の声が聞こ

える—記録と記憶をたどるアジア・太

平洋戦争—」を開催しました。本企画

展では、過去の「語り伝える戦争の

話」で語っていただいた語り部に関

する資料や、兵士として戦争を体験

した方が戦後に制作した美術作品な

どを展示しました。資料に付随する

エピソードを共有することで、戦争

の記憶を次の世代へと手渡す場とす

ることを目指しました。兵士として

戦争を体験された方々は、すでに100

歳近い年齢となっており、直接声を

聴く機会を設けることは難しくなっ

ています。そこで、個人の遺した資料

と、当時の新聞や雑誌といった社会的

記録を並べて展示することで、アジ

ア・太平洋戦争を「個人」と「社会」

という二つの視点から見直す構成と

しました。現在、この展示は内容の一

部を見直し、「記憶」をテーマとした

常設展として継続しています。

また、関連イベントとして、過去の

講話会の記録集から兵士の体験談を

抜粋し、朗読会「兵士たちが語った

戦争—『語り伝える戦争の話』より

—」を開催しました。語り部ご本人で

はありませんが、残された言葉を朗読

という「声」の力で届けることで、当

時の状況や思いを耳から感じ、展示

資料とあわせて、より深く心に響く

時間となったのではないかと感じて

います。

## 5 被害と加害の両面に向き合う

ということ

来館者アンケートで多く寄せられ

る感想の一つに、「日本が受けた被害

だけでなく、加害の歴史にも正面か

ら向き合っている」という声がありま

す。これは、嘉麻市に比較的大規模な

炭鉱が存在し、朝鮮からの移住者や

捕虜の強制労働、さらには捕虜殺害

に関与したBC級戦犯に関する資料

を展示していることに向けられたも

のだと受け止めています。戦争は、ど

こにでもいる普通の人々を、被害者に

も、加害者にもします。資料が語る当

時の戦争の姿は、目を背けたくなる

ような内容ないよう ふくを含むここともあります。そ  
れでも、過去かこに何がなにあったのかしを知り、  
どのようにつた伝えていくのかかんがを考つづえ続  
けることが、戦後せんご80年ねんを経たへ私わたしたち  
に求めもとられていることではないでし  
ょうか。当館とうかんは、これからちいきも地域ちいきとと  
もに、戦争せんそうと静しずかに向むき合あい、考かんがえる  
場ばであり続つづけたいと考かんがえています。

もし、今いまなお身み近ぢかに話はなしを聞きける方かたが  
いるのであれば、ぜひ戦争せんそうのここに限かぎ  
らず、昔むかしの話はなしに耳みみを傾かたむけてみてく  
ださい。そこには、継承けいしょうすべききおく記憶きおくだ  
けでなく、現在げんざい、そして未み来らいをい生きる  
ための道標みちしるべがきつと見みいだせるはず  
です。



うすいへいわ きねんかんにがいかん  
碓井平和祈念館外観

# しょうけい館と戦後80年

こくがくいんだいがくがくいんぶんがくけんきゅうか しがくせんこう ほんし かていこうきたんいしゅとくたいがく  
國學院大學大学院文学研究科史学専攻 博士課程後期単位取得退学。

1999年9月より現職。資料整理、企画展示など学芸業務全般を担当。戦後80年の2025年は、国立ハンセン病資料館のトークイベント「戦争の記憶に触れ、それを継承すること」、首都圏形成史研究会のシンポジウム「戦後80年 戦争を伝える—博物館・文書館の企画展示事業から—」に登壇しました。



しょうけい館

(戦傷病者史料館)

学芸員

はんどう あや  
半戸 文 さん

## 1 しょうけい館の紹介

しょうけい館は厚生労働省が援護

施策の一環として設置した、戦傷病

者等が体験した戦中・戦後の労苦に

ついて、広く知る機会を提供し、また

後世に伝えていくための施設です。

館名の「しょうけい」は、漢字で「承

継」と書きますが、親しみを持っても

らえるよう平仮名で表記しています。

また、館の性格を示すために「戦傷

病者史料館」を併記しています。

館の成り立ちは、1998年に財団法人

日本傷痍軍人会から国に対して、戦

傷病者等が戦中・戦後に体験した

労苦を後世に伝えることを目的と

した戦傷病者等労苦継承事業（仮称）

の実施について要望が出されたこと

をきっかけとして、2000年から調査・

検討が進められ、2006年3月に史料館

が開館することとなりました。2023年

10月、地区の再開発により移転しまし

たが、場所は開館時と同じ九段下（東

京）です。

戦傷病者とは、戦傷病—先の

大戦において戦闘による受傷や、事

へんち せんち りびょう きんむ かんれん  
変地・戦地における雇病、勤務関連に

かん おも ほんぽうとう りびょう  
関しては主に本邦等における雇病一

をお ぐんじん ぐんぞく じゅんぐんぞく さ  
を負った軍人、軍属、準軍属を指しま

す。こうせいろうどうしょう えんごほう せつ  
す。厚生労働省の援護法における説

めい いきよ せんじちゅう  
明に依拠していますが、戦時中に

「しょういぐんじん よ かがた くわ  
「傷痍軍人」と呼ばれた方々に加え、

せんご えんごしやく へんせん ぐんぞく  
戦後の援護施策の変遷により、軍属・

じゅんぐんぞく えんご たいしょう せんしょう  
準軍属も援護の対象となり「戦傷

びょうしゃ めいしょう  
病者」という名称になりました。ま

た、せんしょうびょうしゃどう どう しょう  
た、「戦傷病者等」の「等」は、傷

びょう お せんしょうびょうしゃ かいじょ かんご  
病を負った戦傷病者の介助、看護

かてい いじどう ながねん  
や家庭の維持等のため、長年にわたっ

て ろうく とも つまどう かぞく  
て労苦を共にしてきた妻等の家族を

さ せんしょうびょうしゃどう  
指しています。これら戦傷病者等の

しりょう ちゅうしん ぐんい えいせいへい かんご  
資料を中心に、軍医や衛生兵、看護

ふ かがた しりょう かが  
婦だった方の資料や、関わりのある

かがた しりょう ひろ しゅうしゅう ほぞん てんじ  
方々の資料も広く収集、保存、展示

しています。

じょうせつてんじ へいし あしあと  
常設展示は、「ある兵士の足跡をた

どる」という形で、1人の若者が徴

へいけん さ う ぐんたい はい せんち  
兵検査を受けて軍隊へ入り、戦地で

しょうびょう お やせんびょういん てあ  
傷病を負い、野戦病院で手当てを

う びょういんせん にほん もど ぐん  
受け、病院船で日本へと戻り、軍の

びょういん ちりょう へ たいいん しゅうせんご  
病院での治療を経て退院、終戦後

おんきゅう ていし せいかつ こんきゅう  
は恩給が停止され生活が困窮し、そ

ご こういしょう たたか  
の後も後遺症などと闘いながらも、

しごと かぞく やしな いぬ  
仕事をし、家族を養い、生き抜いてき

たというストーリーで構成していま

す。そのなかで、せんしょうびょうしゃ ひとり  
す。その中で、戦傷病者の一人ひと

りのたいけん み しりょう  
りの体験を見つめられるよう資料を

てんじ  
展示しています。

## 2 せんご ねん と く 戦後80年の取り組み

せんご ねん むか ねん  
戦後80年を迎えた2025年は、2つの

とくべつ きかくてん つうじょう かいき なが もう  
特別企画展を通常より会期を長く設

けて開催しました。

ひとつ目は、「武良茂（水木しげる）

の戦争体験」を初夏から秋にかけて

開催しました。戦傷病者であり、

著名な漫画家である水木しげるさん

の戦地パプアニューギニアでの軍隊

生活と受傷病、現地の人びととの交

流や、代表作『総員玉砕せよ!!』、

『昭和史』などの作品に描かれるこ

ととなった戦争体験について取り上

げました。開館以来、水木さんの企画

展示は行ってきましたが、多くの方

に戦傷病者の体験に関心をもって

もらえるよう、これまでよりも漫画等

の作品を多く取り上げました。

二つ目は、「しょうけい館証言映像

展 証言がつなぐ あの日の記憶」

を秋から冬にかけて開催しました。こ

れまでに収録してきた証言映像を

テーマに据え、収録に協力いただ

いた戦傷病者と家族のたどった人

生を紹介し、寄贈資料を展示しまし

た。しょうけい館の開館準備期間中

から収録を続けてきた証言は現在

200本ほどになりました。直接戦傷

病者の声を聞くことが難しくなっ

てきた今、映像は私たちに多くのこ

とを語ってくれる貴重な資料であ

ることを再認識する機会となったと

思っています。

このほか、国立ハンセン病資料館

と共催で「戦後80年 戦争とハンセ

ン病」を夏に開催しました。しょうけ

い館からは従軍中にハンセン病を

発症し、ハンセン病療養所への入

所を余儀なくされたハンセン病回復

者（戦傷病者）の資料と証言映像

しゅってん  
を出展したほか、しょうけい館の次  
せだい かつ べ  
世代の語り部による講話なども実施  
しました。

ふりかえ  
振り返ってみますと、2025年の夏を  
ピークとして例年以上に来館者が増  
え、特に8月はメディア等でしょうけ  
い館の取り組みが取り上げられる機

かい おお  
会も多くありました。「戦後80年」とい  
うキーワードが、せんそうたいけん  
と知った  
といったきうん  
気運につながり、らいかん  
来館の動機  
となっていたことがよくわかった

いっぽう  
一方で、あきごろ  
秋頃からそのようなふんいき  
雰囲気は  
じよじよ  
徐々に消えていったようないんしょう  
印象も受  
けました。せんしょうびょうしゃ  
戦傷病者と家族にとって

げんざい  
は、現在までのせんご  
戦後の80年間もまた労  
く  
苦のあゆみで、じゅうじょう  
受傷した日、ひきこく  
帰国の船  
の  
に乗った日、びょうき  
病気をしんだん  
診断された日な  
どがわす  
忘れもしない日であり、「終戦〇

ねん  
〇年」、「がつ  
8月15日」といったフレー  
ズがかならずしもふしめ  
節目とはならないので  
はないかともかんが  
考えさせられました。

みちか  
身近にあるたいけんき  
体験記やしょうげん  
証言にふれ、記  
ろく  
録からきおく  
記憶を知ることが、あらた  
改めて  
ひつよう  
必要だとかん  
感じさせるせんご  
戦後80年だった  
とおも  
思います。



やせんびょういん  
野戦病院ジオラマ

ますい  
麻酔なしでのしゅじゅつ  
手術の様子



せんしょうびょうしゃ  
戦傷病者が使用していた  
てつきやく  
鉄脚とよばれるぎそく  
義足

### 3 戦後81年から…

改めて言うまでもないことですが、  
例えば20歳で終戦を迎えた人の年齢  
は100歳を超えており、戦争体験者不  
在の時代の到来はすぐそこまで迫っ  
ています。このことは、2013年に、会員  
の高齢化による日本傷痍軍人会・妻  
の会の解散が決まった戦後68年頃か  
らしょうけい館では強く意識してい  
ました。当館においては戦後70年の  
2015年に、厚生労働省の事業として、  
戦中・戦後の労苦を直接体験した人  
が減少することを踏まえ、次世代に  
伝えるための戦後世代による語り部  
の育成事業が始まりました。戦後70  
年から、次世代の者が戦傷病者の

体験を伝えていく時代に入っていっ

たとも言えます。

戦争の記憶を伝えていくにあたり、

私たちが取り組むべき課題は多々あ

りますが、戦傷病者が遺してくれた

様々な記録は、多くのことを私たち

に語りかけてくれます。記録を残さな

かった、あるいは残せなかった人も多

くいますが、遺された記録を丁寧に見

つめることで、何故記録がないのかも

考えることができます。これからも

変わらずに一人ひとりの体験や記録

を伝え続ける重要性を問い直し続け

ながら、戦後何年であってもしょうけ

い館に課された役割を果たしていき

たいと思っています。

かんちょう  
館長コラム

## 「被害の実態」・「被差別の現実」はどこにあるのか

こうざい ふくおかけんじんけんけいはつじょうほう かんちょう たにぐちけんじ  
(公財) 福岡県人権啓発情報センター 館長 谷口研二

ほんごう ほんどあや きこう  
本号で半戸文さんに寄稿いただき

しゃかいがくしゃ おくだひとし はんしんあわ  
社会学者の奥田均さんは、阪神淡

た「しょうけい館」(東京都千代田

じだいしんさい (1995年)を振り返って、震

く区)について、毎日新聞が報じていま

さい じつたい う と かた へんか  
災の実態の受け止め方の変化につい

す(※1)。そこには、①戦争中多くの兵

つぎ か がいよう (※2)  
て次のように書いています。(概要)

し せいしんしっかん にゆういん きゆうに  
士が精神疾患で入院したが、旧日

しゃしん えいぞう さいがい  
①写真や映像で災害のすさまじさを

ほんぐん ほんざい ひてい どうじ  
本軍はその存在を否定した、②当事

し しえん おとず げんち た  
知った→②支援に訪れた現地で立ち

しゃ かぞく ほんざい ほんざい かんが たいけん  
者や家族はそれを「恥」と考えて体験

きょうふ ちよくめん  
すくむほどの恐怖に直面した→③

かた ひさいじつたい あき  
を語らなかったため、被災実態が明

かくしゅとうけい きやうだい ひがい ぜんたい  
各種統計によって巨大な被害の全体

らかにならなかつた、③近年、元兵

じょうきやう こうしん ひさい  
状況が更新されていった→④被災

し こ せだい つく かぞukai くに  
士の子ども世代が作った家族会が国

しゃ せいかつ おも し ところ きず  
者の生活や思いを知り、「心の傷」

じつたいちやうさ もと ちやうさ てんじ  
に実態調査を求め、調査・展示につ

もんだい さいがい しゃかいてきそくめん き  
の問題や災害の社会的側面に気づい

ながった、と書かれていました。

た……。

このような戦争体験・被災認識の

深まり・広がりを手がかりにして、

「部落差別(被差別)の現実」の見取り

方について論議したことがあります。

まず(a)「見える現実」(差別事象

や生活等の現実を知る) → (b)「見え

てくる現実」(報道や統計を通して、

見えてなかった実態に気づく) → (c)

「語られる現実」(体験を語る人と

で会う) → (d)「語られない現実」

(厳しすぎて「語るができない」

事実があることを知る) → そして、

(e)「相談によって明らかになる

現実」(相談システムや相談できる

関係があることによってはじめて可

視化される実態があることを知る)

福岡県同和教育副読本『かがや

き』(※3)に、「差別があるから 語れ

ない/差別があるから 伝えたい/

一番言いたくないことは/一番わか

ってほしいこと」という歌詞が載っ

ています。

「(被害・被差別の)厳しさが差別

の実態を覆い隠すという差別の恐ろ

しさ」(奥田 均)への想像力をも

って、被害や被差別の現実に向き合

いたいと思います。

自己の「被害への無自覚」は他者

に対する「加害への無自覚」につな

がっていくかもしれません。

(※1) 毎日新聞2026.2.26号

(※2) 奥田 均 『人権のステージ』(1998解放出版社)

(※3) 福岡県同和教育副読本「かがやき」(高等学校用)